くまもとよかまちプロジェクト

～世代間交流を活用した新たなまちづくりのあり方～

崇城大学　北区福祉グループ

渡邊 愛大　栃原 幸佳　前田 剛志　吉岡 レミ　木村 愛瑠　京田 七海　帖地 晃汰　前田 悠貴

地域課題の選択

②「政令指定都市移行10年　今後の熊本市のあり方について」

1. はじめに（項目フォント：MSP ゴシック 10.5）

現在私たち崇城大学情報学部では北区職員の皆様と共に北区の課題解決に取り組んでいる。熊本市政令都市ビジョン 2/3 第Ⅱ章 19 ページに記載のある「地域の特性を活かしたまちづくり」また、熊本市第7次総合計画に挙げられているまちづくりの重点的取組「『おたがいさま』で支え合う地域コミュニティを形成する」という理念がある。この理念を実現するためのツールとして私たちが企画している「世代間交流」を提案する。

2. 現状分析/調査内容

現在の熊本市の人口に占める高齢者の割合は27%、子どもの割合は14%になっている。平成10年からの推移を見てみると高齢者の割合は右肩上がり、子どもの割合は右肩下がりが続いている。[図1)]

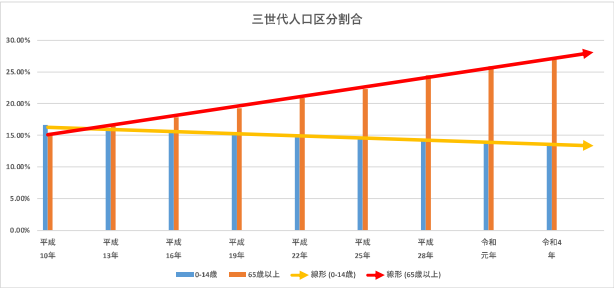

図１：熊本市 HP 人口統計より作成

この状況が続けば現役世代の減少による税収の悪化、医療・社会保障費の増加により自治体の財政が圧迫されることが懸念される。

さらに、要支援・介護者に注目してみると認定要因として認知症に占める割合が高く、2割弱を占めていることが分かる。[図2)]

図２：熊本市東区作成資料より引用　https://onl.bz/4hiftpv

認知症は、医療的支援だけでなく社会的支援が必要とされており、この認知症を予防するだけで介護が必要な人数が2割減少することで介護費を含めた社会保障費を削減することが期待でき、そのために社会全体の取り組みが必要となる。

そのような中、現代社会において地域のつながりが希薄化してきていることが問題になっており、昨今の新型コロナウイルスの流行によりさらに人とのつながりが困難になっている現状がある。自治会に加入する世帯数も減少してきており、子ども会の加入率も減少している現状があり、地域のつながりがますます減少している。このような地域のつながりの希薄化に対し、北区職員の方々と対策を検討していたところ、実際に弓削3町内の自治会長様より自治会の加入率の改善と子ども会の加入率の改善に取り組んで欲しいとの相談が持ち込まれた。

3. 課題に対する解決策と具体的な政策アイデア

この課題を解決するための手法として我々は「世代間交流」を提案する。この世代間交流の対象者としては地域の小学生と高齢者を想定している。

活動内容としてはそろばん教室、囲碁・将棋、宿題の見守り、子どもたちによるスマートフォンの使い方教室などを計画している。この活動は地域コミュニティを再活性化させるだけでなく、お互いが教える立場に立つことによって「おたがいさま」の精神が生まれることが期待できる。また認知症の予防という観点では75歳以上の健康な高齢者を3年間追跡した調査では、独身で独居生活、子どもがいない、近しい関係を持つ者がないなど、社会的ネットワークが乏しい人では，社会的ネットワークが十分な人と比べて認知症の発症率が高かったことなどが報告されている。[1)]
このことから社会的つながりは認知症予防に有効であると考える。加えて、活動内容の中にそろばん教室を挙げているが、この目的も認知症予防である。そろばんなど頭と手を同時に使う活動が認知症予防に良いとの報告がなされており[2)]、70代から80代の方は若い頃そろばんを使用して仕事をされており、今でも使うことのできる方が多くいらっしゃることから子どものそろばん講師としての活用も期待できる。

この活動の独自性としては、子どもが大人に対して教えるという新たな取り組みを行うことである。子どもが講師として活躍することによって子どもの自主積極性が高まることが期待できる。また、子ども（小中学校）時代に「親や学校の先生以外の大人と話すこと」があった若者ほど、「仕事における態度・能力に自信をもっている」との結果[3)]が示されており、子どもにとってもメリットのある活動になると考える。

地域の活動などは自治会や子ども会などの組織が企画運営を行うことがほとんどであり、そうした活動は主催者の負担が大きいことなどから継続性や活動頻度が低下することが一般的である。地域のつながりを持続させるためには、頻繁な活動の実施と継続性が求められるため、セミピュアモデル[4)]と呼ばれる活動手法を用いて、活動参加希望者の承認は自治会や学生がおこなうものの、活動中は高齢者と子どもたちは自由に交流し、過度の負担を主催者に課すことなく活動を運営していくことを提案する。また、コロナ禍のなか、活動会場に足を運ぶことがはばかられる保護者の見学のニーズにこたえるため、また万一の事故発生時における早急な対応や記録保全を目的に、活動の様子をオンライン配信する。この手法を用いることで活動の安心安全が保たれ、参加者である高齢者と子どもたちが主体性を持って活動に取り組むことができると考える。

4. まとめ・今後の展望など

以上のことから世代間交流を用いることによって熊本市第7次総合計画に挙げられているまちづくりの重点的取組「『おたがいさま』で支え合う地域コミュニティを形成する」という目的を達成することができるのではないかと考える。DX の推進などで IT がますます日常生活に溶け込んでいく中で人と人がオンラインだけでなく対面でつながり続けることも認知症の予防という観点だけでなく、精神衛生上重要なことであると考える。この活動を通して地域のつながりが強化され、子育てのしやすいまち、災害に強いまち、生涯すみたいと思える熊本のまちになることを目指せる取り組みにしたいと考える。

現在活動の実施に向けて、場所の確保までできており、打ち合わせを重ねて年末から年明けをめどに実行に移す予定である。加えて、実行後には、主催者、参加者、北区職員のほか地域住民にアンケート調査を実施し、地域のつながりの強化や子どもや高齢者の行動の変化など、活動の効果を客観的に評価することとしている。

これからも我々は世代間交流を用いて地域ならびに熊本市の発展に向けて尽力していく所存だ。

参考文献

[最終アクセス確認日 2022.10.6]

(1) 認知症予防:作業療法からの提案
https://onl.bz/KnqU4Hf

(2) 認知症介護予防モデル事業の紹介と成果について
https://onl.bz/1he3uQc

(3) 特集 家庭、地域の変容と子供への影響-内閣府
https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h20honpenpdf/pdf/tokushu.pdf

(4) セミピュアモデルとは
https://scblab.jp/publication/121-p2p-2.html